

追 悼

藤原隆代さんのご逝去を悼む

化石研究会の創設と発展に大きな役割を果たされた藤原隆代さんは、去る5月19日に、東京都東久留米市の自宅で、虚血性心不全のため他界されました。享年75歳でした。

1959年の創設当初の化石研究会は、古生態、微細構造、進化論の3グループからなり、会員はそのどれかのグループに所属することになっていました。藤原さんは微細構造のグループの責任者をつとめられ、会の発展に大きな役割を果たされました。

東京の山手線新大久保駅の近くにあった資源科学研究所（財団法人）に勤務されていた藤原さんは、化石の生化学の研究（古生化学）のテーマのもとで、各種の化石のアミノ酸分析とゾウ化石のコラーゲンによる石灰化の実験で成果をあげておられました。そのような藤原さんの実績があったからこそ、化石研究会の設立が実現したのだと思います。藤原さんは1961年に古生化学の研究によって、北海道大学から理学博士の学位を授与されました。その後は、ゾウ化石のコラーゲンのX線による構造解析の研究へと研究の幅を広げて行かれました。それらの成果が認められ、1968年には「化石有機物の古生化学的研究」で日本地質学会賞を授賞されました。

1961年に大学院の課程を終了した私は、古生化学への道を歩むべく、藤原さんのもとに弟子入りをして、化石のアミノ酸の分析法を教えてくださいました。その後の研究にあたっては、つねに藤原さんの指導を受け、また協同の研究もさせていただきました。その当時よく訪ねた資源科学研究所の藤原さんの研究室が、今でも懐かしく思い出されます。

化石の古生化学の研究を通して化石研究会の発展に偉大な足跡を残された藤原隆代さんに御礼申し上げるとともに、ご冥福を心からお祈りいたします。

つぎに、化石研究会の微細構造グループに関わるものに限って、藤原さんの業績をあげてみました。おそらく欠落している業績もあるかと思いますが、お気づきの方はお知らせください。

（秋山雅彦）

藤原隆代さんの業績目録

- Ijiri, S. and Fujiwara, T. (1958) Organic constituents of the fossil teeth in the order Proboscidea. Proc. Japan Acad., 34, 280-283.
- 藤原隆代・井尻正二 (1959) 歯の化石にふくまれている蛋白質の分析法. 地球科学, 41, 20-31.
- Ijiri, S. and Fujiwara, T. (1959) Experiment of calcification by organic substance in some fossil teeth. Proc. Japan Acad., 35, 469-471.
- 藤原隆代 (1961) アンモナイトの殻にふくまれるアミノ酸. 地質雑, 67, 97-100.
- 藤原隆代 (1961) 化石のなかのアミノ酸. 国土と教育, 10号, 13-18.
- 藤原隆代 (1961) フズリナの殻の有機成分. 資源研彙報, 54-55号, 2-6.
- Fujiwara, T. (1962) Palaeobiochemical studies on the organic substance remaining in various sorts of fossils. Misc. Rep. Res. Inst. Natur. Resources, 58-59, 141-149.
- 井尻正二・藤原隆代・小林茂夫 (1962) 化石およびヒトの歯の有機物による *in vitro* の石灰化実験とその意義. 地質雑, 68, 83-95.
- 藤原隆代 (1963) 化石にふくまれるアミノ酸の定量分析について (第1報). ペーパークロマトグラフィーによる定量法. 資源研彙報, 60号, 52-58.
- 藤原隆代 (1964) イカの甲を構成する有機物のX線による研究 (予報). 資源研彙報, 62号, 71-78.
- 藤原隆代 (1965) 関東地方貝塚の貝化石のアミノ酸の時代による変化. 文部省科学研究費 (総合) による1964年度中間報告, 33-36.

- 藤原隆代 (1965) 象の歯の X 線回折による研究. ミクロ (文部省科学研究費総合研究, 代表者 大森昌衛), 2号, 2-4.
- 藤原隆代 (1966) インド象の象牙. ミクロ (文部省科学研究費総合研究, 代表者 大森昌衛), 3号, 表紙写真および説明.
- 象の団研グループ (藤原隆代を含む) (1966) ナウマン象, ミクロ (文部省科学研究費総合研究, 代表者 大森昌衛), 3号, 87-95.
- 秋山雅彦・藤原隆代 (1966) 縄文貝塚の貝殻に残っているアミノ酸. 資源研彙報, 67号, 67-72.
- 藤原隆代 (1967) 山西省で発掘された動物遺骸の鉱物学的研究. 資源研彙報, 68号, 133-138.
- Akiyama, M., Fujiwara, T. and Hotta, S. (1967) Amino acid survivals of the fossil shells in Japan. Abstracts of 7th International Congress of Biochemistry, J-59.
- 象団研グループ (藤原隆代を含む) (1968) ナウマン象 (*Elephas naumanni* Makiyama) の歯牙の組織学的・生化学的研究, 化石研会誌, 1号, 35-75.
- 象の団研グループ (藤原隆代を含む) (1968) ナウマン象と古生物学-古生物学における団体研究一. 地球科学, 22, 117-120.
- 藤原隆代ほか4名 (1968) 実験地学ハンドブック, 大久保雅弘・黒田吉益 (編著) 第IV章化学分析法, 築地書館, 108-139.
- 藤原隆代 (1969) X 線回折による化石の硬組織研究. 硬組織研究 (荒谷真平ほか編) 医歯薬出版, 463-480.
- 地学団体研究会編 (1970) 地学事典. 平凡社 (分担執筆).
- 藤原隆代・堀田進 (1971) 第3章生化学的研究法および分子構造解析. 化石の研究法 (化石研究会編), 共立出版, 493-657.
- 藤原隆代 (1971) 4・1生鉱物の合成法. 化石の研究法 (化石研究会編), 共立出版, 659-573.
- 藤原隆代・井尻正二 (1971) アパタイトの合成実験. 資源研彙報, 75号, 113-116.

## ◆本の紹介◆

井尻正二・秋山雅彦 (編著) (1992)  
化石の世界 214+4頁

定価1800円  
大月書店

1986年 (昭和43年) に初版が出た, 井尻正二著「化石」(岩波書店)は化石についての手ごろな入門書として, 多くの人に親しまれ, 版を重ねていた。ただ, 最近増刷がなく, 手に入れることが難しくなっていた。

本書は「化石」が装を新たに, 改訂を加えられて再登場したものである。古生物学を研究・教育するものとして, 学生・一般市民におすすめできる本が再びできたわけで, 大歓迎である。

「あとがき」によると, 秋山雅彦氏が全面的に協力し, また, 多くの化石研究会の会員の人たちが資料を提供している。目次を見る限り, 前著との違いは第4章の第3節がなくなったことだけであるが, 通読すると, 各所に新しいデータが盛り込まれていて, 面目を一新している。例えば, 野尻湖発掘の成果は各所に見えているし, ナウマン, 横山, 矢部ら, 日本の古生物

学の先駆者たちのことが加えられ, 系統樹もゾウのものにとり変えられている。

「第5章 化石をつくる」の改訂は目にとまる。化石研究会の会員の成果が十分にとりこまれている。全体としてみると, 前著を生かし, 最近の成果を加えたものといえる。井尻の考えた古生物学の柱は生きていて, 現在でも他に代えがたいものであることを示すと同時に, その線に沿った研究の成果が上がって, 新しい肉付けが生まれたということである。

欲を言えば, もう少し増補をして, ここに書かれている分だけでなく, 他の関連分野の成果も加えて欲しかった。浮遊性微化石による年代・対比の問題, 軟体動物を材料とした多くの研究などである。巻末の植物系統表が省略されたのも残念である。

前著「化石」は筆者にとって座右の一冊として, 長い間親しんだ本である。啓蒙書であるだけでなく, 古生物学の基本を示すものとして, 研究の指針でもあった。大学における講義にも利用させて頂いた。これからも折りにふれ参考にし, まわりの人びとに推薦したいと思う。そんなたぐいの, まさに「一冊の本」といえる本である。

(糸魚川淳二)